

# 文化人切手「寺田寅彦」をさかのぼる

佐藤 邦夫

## 1. 切手の元になった写真

文化人切手「寺田寅彦」の肖像は遺影に採用された写真が元であるが、それは多摩川へ花見に行った際に撮られた写真（下図）から切り取られたものだ。



多摩川上水畔にて（桜並木下で昼食） 撮影：須賀太郎 昭和9年4月



切手になった寺田寅彦

上の写真と下の切手をよく比べて見ると表情に違いが …

ここに写っている人たちを右端から紹介しよう。

- ① 黒田正夫（1897～1981） 東京帝国大学工学部冶金科を出て理研の眞島正市研究室へ。寅彦に私淑していた黒田は寺田研究室へよく出入りし知遇を得ていた。専門は金属材料学。近代登山の草分けの一人、岩登りの著書もある。初子と 1923 年結婚、「一生の最良の山友達」となる。登山から雪氷の魅力に取り付かれて雪氷学にも取り組んだ。後に日本雪氷学会会長も務めた（1950～1956）。
- ② 黒田初子（1903～2002） 東京女子高等師範学校を出て、20 歳で正夫と結婚。正夫の指導で本格的な登山を始め“おしどり登山家”として有名に。北アルプスの小槍、剣岳を始めに数多くの女性初登攀記録を残す。一方、自宅で料理研究室を 70 年以上も主宰。料理に関する著書も多数ある。
- ③ 日比谷夫人 初子の友人で某重役の夫人。（吉村冬彦の随筆のファンだったのだろうか？）
- ④ 寺田寅彦 （昭和9年4月の撮影なので、このとき 55 歳であった。）
- ⑤ 大瀬 嬢 某女子大の水泳選手。（初子の料理研究室の教え子であろうか？）

撮影者は須賀太郎（1903～1986）

理学博士、専門は高真空工学。（理研から）名古屋大学工学部教授を経て、豊田工業高等専門学校の初代校長を 1974 年 3 月まで 10 年間務めた。スポーツを通じた学生交流に力を注ぎ、1964 年から「須賀杯駅伝」を興した。豊田高専→名大の 27 km（6 区間）を両校の数十チームが競っているという。

## 2. “好きなもの イチゴ・コーヒー 花・美人…”と“花見”の写真

『思想』第166号 特輯・寺田寅彦追悼号に黒田正夫と黒田初子が寄稿し、この写真が撮られた経緯を詳しく書いている。旧字旧かなだが、なかなか面白い文章なので引用してみる。

### 「宇宙見物」

黒田 正夫

好きなもの 苺コーヒー 花美人 ふところ手して 宇宙見物

此の歌を戴いたはお互のいたずら心のいきさつがあつたのである。

寺田研究室では毎水曜の夕お茶の会があつて研究室の全員を集めて宇宙見物の土産話をしてをられた。僕は室外のものではあるが、時々推参してはその土産話を聞かせて頂いては茶菓のご馳走になつてみた。(中略) そんなお茶の会の席上、僕が「先生は一体何が好きですか」ときいてみた。

「おいしいもの、きれいなもの、何でも面白いものはみんな好きだよ 殊に苺をみてみると涎が…」

その数日後のことである。理研への途上、きれいな苺が目についた。早速買って来て、寺田研究室からお茶碗の敷皿一枚かりてそれに盛って、之を実験機械の箱に入れて、わざと小使に「拝借物をお返しします」といって先生のところに持ってゆかせた。次のお茶の会の時は伺はなかつたが、研究室の人たちに「黒田君にやられたよ」と話されてくやしがつてだつたそうだ。

こっちはそれっきり忘れていたが、冬休みにスキーから帰つて来たら、机の上に先生の字で「応用物理原稿」とかいた状袋がのせてあつた。何気なくあけてみたら、皿に盛つた苺がきれいに水彩画でかいて、そのふちにローマ字でさっきの歌がかいてあつた。元旦試筆である。蝦調といはうか、嬉しくなつて早速額にいれて机の上に飾つた。以来、この色紙はきたない研究室に紅一点として輝いてみて、眞島先生、辻君を始め、ほんものの苺とは比較にならぬ程の垂涎物となつたのである。(中略)

それから、櫻の頃をまって「先生は寒いのが大嫌いだから」お花見に引っ張り出して、この歌を地でゆこうとした。そのときの先生の寫眞がお形見となつて了つた。…

### 寺田先生の思い出

黒田 初子

初めて先生が私の家へいらした時は、胃が悪いといふ前ぶれで、私は消化のいい物ばかり拵えて御待ちした。軟い御料理を、ゆるゆる召上つてはニコニコしていらした先生の御顔が目には浮かぶ。あの時「君達は幸福だね、羨ましい程だ」とおっしゃつた。理研では黒田がよく御世話になつてゐるが、或日先生から御自筆の額入の画を頂いた。その画のそばにローマ字で「好きなもの 苺コーヒー 花美人 ふところ手して 宇宙見物」と書いてあつた。その後、いたずら好きな黒田が、「先生を御花見に誘はうよ」と言出した。そうして、苺とコーヒーをもって行き、美人も探して連れて行き、先生を微苦笑させようといふことになつた。然し、先生にはただ「御花見に御一緒に行きませう」と申し上げたのみであつた。こちらとしては美人を探すのが大難事で、美しい友達の誰彼を思出して物色した。中々無いものである。顔が美しいばかりでなく、先生と御話をドンドン出来るやうな人でなくてはつまらないし、あまり若いお嬢さんでは、誘つても来て呉れるかどうか判らないので、ずみ分困つた。其処で、現在ではとにかく、若い頃は絶世の美人だつたといふ友達に委細を話して、美人の一役を買つて貰ふことになつた。「先生だつて相当おぢいさんですもの、美人だつた、といふのでいいわ」などと自己弁解しながら。その友達は「顔には自信が無いから、サービスの方で参りませう」と快諾したし、其日になつて美しいモダンなお嬢さんも誘ふことが出来た。(中略)

自動車に一同乗つて小金井の奥へ行つた。花には少し早かつたが、春の日は和やかに照り、櫻の木の下での御べんとうは實においしかった。苺もコーヒーも出た。…

したがって、「好きなもの 苺コーヒー 花美人 …」の歌は黒田正夫のいたずらによって生まれたものであり、「花見」の写真は黒田正夫・初子夫妻の企てによって撮られた一枚であったと言える。黒田自身は意識していなかっただろうが、「寺田寅彦」を後世に伝える大きな役割を果たしたことになる。

付記

『思想』第166号 特輯・寺田寅彦追悼号には女性が4人寄稿している。黒田初子の他は掲載順に、野上彌生子、美濃部民子および圓地文子とである。彌生子は野上豊一郎の妻で昔からの知り合いであるし、文子は圓地與四松の妻なので與四松とともによく寺田邸を訪ねた縁があった。（したがって、黒田・野上・圓地の3夫妻がそれぞれ追悼文を書いているわけである。）一方、美濃部民子は美濃部達吉博士の妻である。寅彦は達吉博士と特に付き合いがあったわけではない。民子書いているが、名を伏せてある友人（実は高嶺俊夫博士）がある事情からノイローゼになったとき、民子の手に残って寅彦に相談し、寅彦が高嶺俊夫と美濃部民子の間に入って、うまく事を収めたことがあったのだ。この秘話は小林惟司著『改訂新版 寺田寅彦の生涯』（東京図書、1995）に詳しく書かれている。

理化学研究所HPに関連した文章を発見したのでここに転載する。

理研 Navi>理研トリア> [一水島寒月のモデルは寺田寅彦博士](#)（2008年7月18日掲載）

寺田博士の写真は理研にほとんどありません。理研関係の書籍には文化人切手にも使われた写真「多摩川上水畔にて（昭和9年4月）」がよく掲載されています。「桜並木の下で昼食」との注釈があるこの一枚の写真については、当日同行し、撮影した理研OB\*が詳細に語っています。

**須賀太郎の回想\***（\*HPにはOBの名を記していないが須賀太郎であることは明らかである）

黒田正夫の研究室（当時の眞島正市研究室）に寺田寅彦の苺を盛った水彩画の色紙があり、ローマ字で「好きなもの 苺コーヒー 花美人 ふところ手して 宇宙見物」と書き添えてあった。黒田正夫はこの歌を地で行くことを考え、美人同伴で苺とコーヒーを用意し、先生をお花見に誘って驚かせようと計画した。先生と話が出来ると品のある美人は黒田夫人が選考し、女子大の水泳選手が同行して小金井の八重桜を見物することとなったのである。一行6名は、桜並木の下で昼食、登山用コップで湯を沸かし、コーヒーも苺も出された。寒がりの先生は外套（がいと）を着たまま、楽しそうに宇宙見物をされたのだろう。

想像するに、須賀太郎は黒田正夫から「寺田先生と花見に行こう！」と声を掛けられ、カメラマン役を引き受けたのだろう。この写真が遺影になったり、文化人切手になったりしたわけで、本人も意外な展開にさぞ驚いたことと思う。（筆者はこの小文を書こうとして「須賀太郎」を知った。）

### 3. 切手の原画作者と原版彫刻者

『切手になった日本文化人』（高久 茂編、一二三書房、普及版 1954）には文化人切手関係者がさまざまな経緯を寄稿している。これによると「寺田寅彦」の原画作者は木村 勝、原版彫刻者は渡部文雄であった。木村 勝（郵政省郵務局管理課長補佐）が執筆した「文化切手の原画をつくる」の最後の文章「寺田寅彦」には次のように書いてある。

このシリーズの殿\*を承わる寺田文化切手の原画を描き了えて、三年越の重荷がおりた様な気がしました。この切手も白抜きで描きたかったのですが、体の向きの関係上料額数字も白抜きにしなければならぬので止めました。然しやはり全体に弱い様に思えます。そのうえ左下の余白が目立ちすぎてやはり左に向きをかえればよかったと思います。（\*「しんがり」とは最後のこと）

また、渡部文雄（内閣印刷局彫刻作業主任、大蔵技官）執筆の「文化切手の原版彫刻者の一人として」には寅彦切手を彫った際のことについての記載はないが、原版彫刻者の珍しい文章なので抜粋する。

切手原版を彫刻する過程について一寸説明しておく。（中略）一応図案者の意図、希望を色々御伺いして十分な知識を得て彫刻を初めるのである。図案は四倍に描かれて有り、それを写真にて原寸「切手の印面」に縮小する。其の印面の眼鼻口顔の輪郭等を透明なゼラチン板に鉄針で写し取って鋼鉄板に転写するのである。ゼラチン板の針で彫り付けられた部分には弁ガラ等の色をつめて置いて鋼板にあてて上から押して転写する。其の型の上を針で軽く掘りつける。其の針の跡が其の後の原版彫刻の土台である。（中略）拡大眼鏡を使い彫刻刀を持って彫刻して行く。鋼板に刻むので彫刻刀は最も上質の物でなければならない。現在はスイス製のものを最も優としている。この彫刻は鋼鉄に彫刻するもので、一たん彫られたものは消し去る事は至難である。一線一点と注意深く彫刻し完成されるのである。線の入れ方一つでも画面の出来不出来に関係してくる。試みに皆さんも拡大眼鏡を手になされて、この文化切手の一枚一枚を御覧願ひ、私達彫刻者の苦心の幾分でも理解頂ければ幸甚である。

私の製作した文化切手の数点につき感想を申述べれば、（中略）夏目漱石先生は、図案された木村先生のご希望で明るく彫刻されたもので、その単純化とバックのつながりには苦心の作であった。固いものになって今では恥ずかしい思いである。（中略）私の手がけた「彫刻された」文化切手の中で正岡子規先生の肖像には全く困難した事を思い出す。病む人特有な弱々しい中にも強い意志のにじみ出た感じ、頭髪のやわらかい表現、写真を見た時にどう表現し彫刻するかには迷ってしまった。（中略）画紙に幾枚も線の入れ方を描いて研究して見た事も今ではたのしい思い出である。

これを読んで当時の切手製作者の真摯な態度が窺えるような気がした。それに比べ、現在はどのようなだろうか。筆者はよく切手を買う方なので、郵便局へ行く度に新しく発行された切手を見ているが、一見して“手抜き”製作されたと思われる切手もある。残念なことである。

#### 4. 選から漏れた文化人たち

『切手になった日本文化人』（高久 茂編、一二三書房、普及版 1954）によると、そもそもは幸田露伴が昭和 22 年（1947 年）に亡くなった後、その記念切手発行提案などに刺激されて、文化人切手の具体化が進んだのだそうである。しかし、露伴は漱石や子規と同年生まれであり、その文学仲間では一番長生きをしたので選から漏れたようである。結局、露伴は没後 50 年の 1997 年（平成 9 年）の文化人切手となった。

自然科学者では最初のリストに、伊能忠敬、高嶺讓吉、北里柴三郎、杉田玄白、関孝和などの名も上がっていた。選にあたった郵政審議会専門委員の菅井純一（神奈川大学教授）は、他にも桜井錠二、鈴木梅太郎らも対象になったと記しているが、甲乙付け難かったというのが実情のようである。家永三郎によると「石川県の人々が高嶺讓吉を入れたい、というので、私のところまで陳情書が舞い込んだ」とある。（今年は米国へ日本の桜を寄贈して 100 周年、その提唱者・高嶺讓吉が石川県で再び脚光を浴びている。）

なお、菅井は「将来またこういう機会が与えられ、わが国科学文化につくした人で、選にもれた人、選定当時現存のため選からはずされた人々（例えば、長岡半太郎、田中館愛橘、仁科芳雄の諸博士、さらに鳥居竜蔵博士、また必ずしも自然科学畑だけとはいえないが、南方熊楠翁など）が文化切手となる日をまちたいものだと思う。」と締めくくっている。

これらの意見を参照して 1992 年からの第 2 次文化人切手が発行されたようである。（完）